ISSN 0385－9517

史料報

第58号

平成5年3月

構造分析と記録管理史研究

保坂裕興
（学習院大学史料館）

はじめに

文書館学（史料管理学）の課題の一つは、不特定多数の人々の科学的な史料利用を支える方法の確立にある。実際、文書などの生成・伝達を省察すると、作成者が表現した文字記号や文章と意味しようとした内容のズレ、説明されることのない共同主観的な約束ごと、さらに読み手の側にも少なくとも同様の問題が横たわっており、「読めばわかる」といった考え方は成り立たない。このような不安定さを乗り越えて至当な解釈に辿りつくには、本来、残された記録情報群を徹底的に構造分析することによって、作成母体の諸機能・知識（記憶）構造と文書作成の連関までを見通す膨大な作業が必要である。文書館の史料整理から基本目録作成までの過程は、これらを組織的に代行し、科学的な利用の基になる知的資源をつくりだす業務でなくてはならないのである。

広く知られるようになった安藤正人氏の「文書群の階層構造」論は、これらに最もふみ込んだ理論である。すなわち、①組織管理論、②組織機能と原秩序の関係を見きわめる文書管理史、③記録情報の内容分析の手法によって、蓄積・作成母体（文書群全体‖グループ）の組織機構（第一次構成基準‖サブグループ）、機能（第二次構成基準‖シリーズ）、記録形態・類型（第三次構成基準‖サブシリーズ）を上位から下位へとヒエラルヒー状の構造として理解し、分析を進めるのである。しかし氏自身が示唆したように、組織構造が不明確である場合は、②③の手法に多くを依存してさまざまなレベルの構造分析を重ね、最終的に下位から組み立てていく必要があり、少なからぬ困難が立ちはだかる。筆者は、これらに関わる知識を広く蓄えて「階層構造」論を鍛え上げていくために、書くこと（記録行為）に関する一切のマネージメント（管理）の歴史研究が必要だと考える。そこでは、管理母体の位置付け・構成・権限、情報の受入・利用、記録情報の作成・伝達様式・存廃選択・保全措置などまでを、理念・技術・用具・装置・建造物等を含めて対象とし、共時的な構造と通時態の構造変化を明らかにすることが求められよう。

ここでは、かりに記録管理史研究と名付け、史料館編『史料の整理と管理』（岩波書店、一九八八年）八四・五頁に例示された氏の階層構造図を念頭におき、村方文書の事例を加えながら一端を示してみたい。

一　内部組織と隣接文書群

はじめに組織機構に関わる階層（第一次構成基準）の問題を見よう。この場合、最終的な階層構造比定には全階層を通しての検討が不可欠だが、直接には一段下位の機能の階層（第二次構成基準）をあつかう。

組織体たる村の機能を概観できる史料には、名主・組頭等の文書引継書、職務に関わる手控・村議定・済口証文などがある。武蔵国上名栗村（現埼玉県名栗村）名主町田家文書（学習院大学史料館所蔵、以下同事例の詳細は拙稿「村方騒動と文書の

――目　次――

構造分析と記録管理史研究……保坂　裕興(1)
史料館叢書別巻Ⅱ『江戸時代の紙幣』の刊行……鶴岡実枝子(4)
大名家文書に存在する村方騒動文書――『真田家文書目録』（その六）の刊行によせて――……森　安彦(5)
中埜半左衛門文書の整理を終えて――昨今の史料目録刊行と電算データの有効利用――……大友　一雄(6)
第十二回国際文書館評議会（ICA）大会参加記……丑木　幸男(7)
史料管理学研修会検討会開催……(9)
新収史料紹介……(10)
受贈図書……(10)
彙報……(13)

作成・管理システム」、『学習院大学史料館紀要』第六号）の場合、一七二四（享保九）年の年貢等勘定をめぐる村方騒動で新・古組に分裂することになり、数種の済口証文が作成された。すなわち、①年貢等の勘定は両組が別におこなう、②上名栗村の検地帳・年貢割付状・皆済目録の本紙は両名主が封印し、古組名主が保管する、③両名主は②を写して使用する、④勘定諸帳面は両組同様に仕立てる、⑤村入用は各名主が随時帳面に記入し、組内惣百姓が相談の上、差し引きする、（以下略）である。

まず注目すべきは、機能の範囲や内部組織との関係、通時的変化である。つまり、町田家は、古組内の年貢等勘定以下の諸帳簿等作成などと②の機能を担い、古組に関わる文書群と②の村文書Aを形成したこと、また以前は村全体の名主として諸機能を管掌したので、村名主文書Bを形成していたことが推測できる。これらは二で触れる第三次構成基準からも確認されるので階層構造図としては、一七二四年以前の村名主文書Bと以後の古組名主文書が組織の階層（第一次構成基準）を構成し、村名主文書Bに接合されるかに思われる村文書Aは、古組名主文書の下位に機能レベルのものとして配置されるのである。

このような手続きによって母体の内部組織と管理の範囲を明確化すると、外部に隣接する文書群を析出することが可能である。町田家文書の場合は、共に村の記憶を構成し、かつ村文書Aを含まない新組文書が存在したといえる。

この階層において、このように機能・内部組織・管理の範囲・隣接文書群の問題を扱うことは、管理母体の内的・外的な情報のあり方、ひいては知識（記憶）構造を理解する出発点になるのではなかろうか。また、組織集団の「重層と複合」によって近世社会のトータルな把握を提起した社会集団論（塚田孝「社会集団をめぐって」、『歴史学研究』五四八号、八五年）、そして昨年の全史料協大会テーマ提案の「地域史料群の性格」論（『第一八回全史料協全国大会文書館制度の拡充をめざして』二七頁）を深化させる意味で重要だと考える。

二　機能の変化

次に機能を柱とした階層（第二次構成基準）である。一ではこれを大まかに扱ったが、具体的なあり方は先と同様、一段下位の個々の文書の階層（第三次構成基準）において検討する必要があろう。ここでは、文書相互の共時的な構造をおさえながら通時態の構造変化を見きわめる手法をとる。

町田家文書を年貢等勘定に関わる文書に絞って見てみよう。先の村方騒動が発生する一七二四年以前は、①年貢小割帳で年貢と高割にできない小物成を小割りして徴収、②①の押切判の年貢小手形を発行、③高懸り三役・高割の小物成・村入用を諸懸り物村入用帳に随時記入し、高割り額を算出、④勘定差引帳で①の過不足に③の高割り額を加えて徴収し皆済する、という共時的な構造Aをもち、村内百姓のほぼ全員を対象としていた（前掲拙稿二八頁）。

しかし一七二五年以後、古組百姓のみを対象とする共時的な構造B（拙稿図一）に変化する。すなわち、①三度取立大積り帳で、前年の年貢諸役・村入用を三度にわたり徴収し、年貢はそのつど上納、②年貢割付状を受理したのち新・古両組の突合帳を合綴した小割帳を作成、③勘定鑑請取帳で②を鑑銭勘算して①との差額を徴収、④皆済突合目録帳で両組の①を突き合わせ一村の皆済金を上納、⑤村入用夫銭帳をもとに村入用鑑割帳で①との差額を徴収、⑥皆済目録を受理したのちに諸懸り物勘定鑑割合請取帳で諸懸り物ほかを清算するとともに、割付状・皆済目録の「拝見」を確認して組内惣百姓連判、⑦②の小割帳と⑥の押切判による年貢小手形を発行、である。これらによれば、共時的な構造Aの文書と同Bの文書が仮に同じ表題を有していようとも、まったく異なった内容を持つとともに同じ機能下にないことが明白で、同時に第一次構成基準を二つに弁別したことの妥当性が確かめられるのである。

さらにBの通時態を追うと、一八〇三年から本格的変動を生じて一八〇九（文化六）年には共時的な構造C（拙稿図二）に変化し、六〇年代まで保持される。最も主要な点は、①夏秋取立帳、②年貢小割帳、③村入用帳、④三度差引帳で①②③ほか全ての算出額を差し引きして皆済金を徴収する、ことでほぼ完全な三度徴収方式を実現したことにある。AやBもそうだが、このCのどの一つも、①②③④という関係の中でしか正確に位置付けることができないことが重要である。階層構造図においては、第三次構成基準以下でこのBとCの構造をできる限り表現するこ

と、遡って機能の内容変化を認め、第二次構成基準において弁別して表現することが求められる。

記録情報群の「階層構造」的理解のためには、このような手法によって個々の文書の秩序と変化を把握し、第一次構成基準の妥当性を確認するとともに、第二次構成基準を具体的に捉えることが必要だと考える。

三　文書管理機能と原秩序

第二次構成基準における特別な問題として、文書管理機能について触れたい。そもそも全ての機能の完遂と不可分なので全体の把握は至難だが、他の機能との関連が比較的薄く、文書を直接に扱う業務、たとえば帳面改めや文書保全措置などに具体的に認めることができる。

町田家は、一七二四年と一八〇三（享和三）年、流地による貢租負担者の変更を確認せざるを得なくなり、帳面改めをおこなう。後者の作業は、延べ五三〇人・金三九両をかけ、①検地帳の写しを作成し、一筆毎に番付、②流地の届を綴にした畑譲渡証覚帳に依拠して地押し・名所押しをおこない、③②の結果を①に付け札や朱書で記入、④確定した所持者に①に照応する鑑札を発行、⑤取下げ場や屋敷成りなども同様に処理、⑥両組反別出入調帳を作成して新組・古組間の変更を記入、であり、大量の文書を駆使・作成して基礎データを大幅に訂正した。なお二の共時的な構造AからB、そしてCへの改変が、これらを前提としたことは見落とせない。

さらに町田家はこの直後に書物改目録、さらに新組の依頼で一八一三（文化一〇）年に帳面改めを代行した後には夜着店帳面取調帳を作成した。前者は一の村名主文書Bと村文書A、さらに古組文書の当用文書を含む文書目録、後者は古組名主文書のうち年貢等勘定関係の年次文書で「当時不用」とされ、布団倉の不用棚に移された文書の取調目録である。とりわけ後者は各文書が一〇年前後を目安に一括されて番付けされ、表紙に「此帳面猥ニ取散すべからず」と朱書されており、保管確認・保全されていたことが知られる。

また前者には「前々遣村入目廿六冊、外ニ二冊、此分不用棚ニ入置候」と記された部分があるので、当用段階が終了した時点で随時後者に移管されたと推定される。

すなわち当用・当時不用を基準とした文書保全措置により、当用段階の秩序が変更された後、原秩序が形成されたと見ざるを得ないのではなかろうか。

以上のように着目すると、階層構造図に工夫をしながら、文書管理機能を位置つけ、その直接下位に少なからぬ文書を配置すること、文書保全措置後の原秩序を表現すること、が課題として提出される。

四　管理装置と建物の構造

三の問題を具体的に捉え、多角的に検討するには、管理用具・装置や建物の構造などまでを対象にする必要があろう。

信濃国五郎兵衛新田村の場合、名主家文書の諸書物見出手引帳、諸帳面書物・名主付道具引継目録帳などによって、寛・仁・法・豊・大・度・用・黒櫃・水帳箱・神事箱と名付けられた文書簞笥・懸硯・書櫃が存在したことが知られる。詳細は拙稿「近世五郎兵衛新田村の文書管理と村政」（『学習院大学史料館紀要』第七号、九三年三月刊行予定）に譲るが、これらの目録類と現存する寛・仁・豊・水帳箱の墨書（学習院大学史料館所蔵）からは、引き出し毎の収納文書や簞笥毎の使い分け、そして一部は別称・制作年代・配置場所、さらに通時的変化や移管の様子、等々の情報が得られた。これらを現家屋や古写真等から復元した一九世紀前半の家屋図におとしてみると、正門と母屋北側の空間が私的であるのに対し、中庭を中心に東門・手習い所と御用場（母屋の南側）・代官間・土蔵で構成される空間が、百姓たちの出入りする公的共同空間であったことがほぼ判明したのである。

もう一つ甲斐国辺見郡長坂上条村の事例を示そう。現長坂町上条区には三つの文書簞笥が伝来するが、「寛政拾午年求之」ほかの墨書をもつ簞笥の小扉内の引き出しからは竹根に結び付けた四つの鍵を発見できた。その奥には升状の隠し引き出しがあり、そこに収納されたと推定されるものである。腐食のために対応関係を確認できなかったものの、もし物理化学的検討がなされれば、簞笥相互の従属関係を推測することが可能となるのではなかったろうか。なお、文書簞笥等の分析には小泉和子『簞笥』（法政大学出版局、八二年）が有効であることを添える。

以上きわめて不十分な提起であるが、仮称記録管理史研究を進めることで、記録情報の歴史的証拠価値と問題の所在をより豊かにみつめることができるのではないかと考える。これらにより、「階層構造」論を練り上げ、さらには文書館学をぜひとも支援したいものである。

史料館叢書別巻Ⅱ
『江戸時代の紙幣』の刊行

鶴岡　実枝子

幕藩体制社会と呼ばれる江戸時代の貨幣制度は、中央政権である徳川幕府が金銀銭三貨の発行権を独占し経済的権力基盤の重要な支柱としたことはよく知られている。そしてこの幕府の正貨のほかに、財用不足解消策として諸藩が幕府の認可制のもとで、いわゆる藩札＝紙幣を発行し原則として領内に限って通用させたことは歴史的知識として定着している。ところが江戸時代にはこの藩札以外に、寺社・宮家・町村をはじめ富商・富農の組合・個人レベルの私札が各地で発行され、行使されていた事実は、一般には殆ど知られていない。

本書は史料館が所蔵する「日本実業史博物館旧蔵資料」のなかの古紙幣コレクションを整理し、目録化したのを機会に、地域別に各地で発行・行使された古紙幣の代表的なものを選んでカラー印刷に付し、併せて史料館所蔵の「古紙幣目録」を収載して、その全貌を紹介するものである（実現することなく終った「日本実業史博物館」の設立計画と収集資料の概要、およびその当館への移管の経緯については『史料館叢書別巻Ⅰ』解説、『史料館報五七号』参照）。

ところで、日本における紙幣の始源は一七世紀初頭、慶長末年の伊勢国の山田羽書とすることが、ほぼ定説となっている。その発生は金子のやりとりに端数が生じて不便なためその端銀の額を紙片に書いて相手方に渡し、何時でも現銀に引換えることを約束した端書（引換証・預り証）が、やがて兌換券としての機能を持つようになり、紙幣の体裁を整えるに至ったというものである。もっとも中世末に堺と共に自治制を有したことで知られる摂津国平野郷町では天正三年（一五七五）から銀札が始まったとする伝承もあり、伊勢国のほか大和国・摂津国など畿内農村にも近世初頭から私札の流通が始まっていた。それらは何れも中世末以来の悪銭の増加＝精銭の不足と、それに伴う撰銭現象、更に一六世紀中ごろから急速に進展した金銀鉱山の開発による金銀貨使用の拡がりによる小額補助貨幣の必要など、貨幣需要の多かった先進地において代用貨幣の行用が始まったとみられる。

慶長六年（一六〇一）に始まる徳川幕府による幣制の統一は寛文―元禄の間にほぼ確立したとされているが、それは前代から存続した領国貨幣の消滅過程でもあり、また福井藩を初めとする北陸・中国諸藩の藩札発行の時期にも当る。宝永四年（一七〇七）幕府は全国法令を以て一旦札遣いを禁止したが、その後正徳―享保の改鋳によるデフレ期の享保一五年（一七三〇）解禁令を公布した。以後藩札発行の藩は急激に増加し、幕末には三百諸侯のうち八〇パーセントに及んだという。そして後期には藩札に対する幕府の統制は殆ど無力化し、無届で発行する藩札や旗本札が大勢を占めたと思われる。

このような藩札は濫発による「札崩れ」や兌換準備金の枯渇によって不換紙幣化し、札価の低落や物価の暴騰をもたらした事例も少なくない。そして化政期以降になると民間の種々の私札が発行され、局地的な流通ながら札元の財力に対する社会的信用に支えられ、藩権力により強制通用させられた藩札よりも、むしろ順調に流通したとみられている。

ところで従来このような幕府正貨の代用貨幣としての紙幣は、その発行主体別に大名札・旗本札・寺社札・宮家札・町村札・宿駅札・鉱山札・私人札等に類別されている。これらは極めて表面的な類別に過ぎないのであって、個別に検討すれば藩札・旗本札に名を借りた実質私札に類するものを含むと思われ、また宮家札・寺社札なども富商・富農を札元とする私札と、さして異なるところはなかったかと推測されるものの、その実態は明らかでない。

また、このような藩札をはじめとする諸種の紙幣の発行の仕組みなり発行高、その果たした経済的機能なり影響は、その発行された地域の経済構造によって一様ではなかったと思われる。それらの検討は権力の問題を含めて、幕藩体制社会の構造的特質の解明、および日本の近代国家の幣制史にも拘わる重要な課題に連なるものであり、本書の公刊がその素材を提供する一里塚となり得ることを期待する。

東京大学出版会発行
A4版　布装貼箱入
カラー図版二二四頁
古紙幣目録一一八頁
解説三八頁
定価三九、一四〇円（税込）

大名家文書に存在する村方騒動文書

―『真田家文書目録』（その六）の刊行によせて―

森　安彦

一、村方騒動文書の特質

一般に村方騒動文書は当該村の村役人文書に訴状や済口証文等が残され、それによって大略が把握される場合が多い。しかし、この大名・真田家文書の中に存在している村方騒動文書は、原告の訴状、被告の反訴状、代官所・郡奉行所の尋問に対する関係諸村や関連人物の答書、吟味書、郡奉行から家老に対する伺書、内済証文、処罰書、和談規定書、寺院等からの赦免願書等、およそ騒動に関係する一連の文書が殆ど散逸することなく一括して存在しているところに大きな特質がある。これは、まさに村方騒動の全体象が把握できるとともに領主裁判権の実態が明らかとなり貴重なものである。

これらの包括的な村方騒動に関する文書を検討することは、近世史料学としても重要な視点を提供するものである。

今回の目録では、その一部として、村方騒動三五件の文書を収録した。これらの村方騒動文書は天明五年（一七八五）から明治三年（一八七〇）までの八五年間に及ぶが、その中心は文化文政期（一八〇四～二九）から天保期（一八三〇～四三）の約五〇年間に集中している。

ここでは、村方騒動文書の中から若干の事例を紹介してみよう。

二、村方騒動の若干の事例

文政九年（一八二六）「保科村小作年貢引方騒動一件」は、小作人らが悪作のため小作料の引方を代官所へ嘆願したことから始まった。代官所では当作の小作引方の相場勘定の規定について地主側に尋ねたが、地主側ではこのたびの一件では小作料は一文も受取っていないと述べ、小前代表は詮議中手鎖となって町宿預けとなり、さらに数名は入牢となり、村方では牢扶持を命ぜられた。地主藤太らは吟味人親族悲嘆ゆえ赦免願いを代官所へ提出した。郡奉行は家老宛「申上書」で、小作相場引下げ一件は小作人の増長で地主に非分なき旨を述べている。これにより一件処罰案として、小前代表大吉は二〇〇日過怠牢夫、扶持方は親類賄い。重三郎は役儀取上げ過料銭二貫文。太源治他二名は持地欠所のうえ、鬼無里村御林内の開発労働となり、地主惣代藤太は叱りとなった。

天保三～一〇年（一八三二～三九）「下真嶋村寅吉不法田畑譲渡一件」は寅吉が不行状一件で、同人母より寅吉の所払いが申立てられ、三役人は困惑している旨を郡奉行所宛に答書している。寅吉の答書では、母に隠居料として一〇石遣し、自分持高二〇石は本家与右衛門に預けて、自分は同人の厄介となる旨を述べている。寅吉親類連印答書では、寅吉の不行状は同人母が弟を偏愛するための旨を書いている。寅吉は親類一同に宛て家内和合、農業出精の誓書を提出し、親類らより「吟味流し」にされたき旨の縋書を代官所へ提出した。家族史の史料としても興味深い。

天保七～一一年（一八三六～四〇）「清野村新田地代金等混雑一件」は旧名主伴右衛門の新田割地の取計方につき穿鑿命令が出された。それによると、売払い地所代金一〇〇両余のうち、郡役御手充金九両余を着服した風説があると指摘している。某「内密申上書」によると、伴右衛門については、近年夫銀倍増、新田売却代金不明、田畑年貢手充引も割戻しなし、役中不正利得の疑惑等があり、この伴右衛門の不法の処置は春日儀左衛門も承知のうえでのことと述べている。五人組合惣代等から、名主役を三年任期の入札制と致すべきことの意見が代官所宛に出されている。また小前惣代からも、名主役は二、三年の任期制や小前からも相応の商いを致すものを村役人に任ぜられたいという意見が相次いで提案されている。これは名主の世襲制が種々の弊害を生むことを村民共通の認識としてもっていたということを示すものである。

以上、わずか三件の事例の簡単な紹介であるが、村方騒動を通じて領主と農民は深くかかわっていることが判明する。大名文書に存在する村方騒動文書の意味は大きいといえる。

中埜半左衛門家文書の整理を終えて
―昨今の史料目録刊行と電算データの有効利用―

大友一雄

史料館では毎年二冊ずつ館蔵文書の史料目録を刊行してきた。史料整理は、教官一人ずつが文書群一山を担当し、数年かけてカードをとり、目録として刊行する。仕事量を勘案し計画的に作業を進めればよいのであるが、腰の重い私などは予定された刊行年度となり、慌てることになる。しかし、研修会など他の仕事を兼ねながらのカード取りは、慌てたところで短期間に終えることは不可能であり、私もそれなりに準備は進めた。今回担当してきた尾張国知多郡半田村（愛知県半田市）の中埜半左衛門家文書の目録刊行に関しては、何とか責任をはたすことができそうである。

中埜家は近世に半田村や近隣諸村の庄屋役を勤め、近代には副区長・戸長・町長などの要職に就いている。これらに関する文書は、同家文書全体のなかでも主要な位置を占める。また、天保期から明治四十年代にかけての家経営に関する文書群も大変密度の濃いものであり、地主経営をはじめとする同家の経営状況を相当詳細に把握することができる。すでに研究論文もあるが、さらに様々な検討が可能であろう（具体的な点については『史料館所蔵史料目録』第五八集を参照されたい）。

ところで、近年コンピュータを利用して文書目録を刊行するケースをよく見かける。また、フォーマットの設計方法や文書群の持つ階層的秩序をどのように処理すればよいかといった問題も耳にする。コンピュータの利用方法が問題となっているが、全国的な動向を見渡すならば、目録作成に関係してコンピュータを利用するケースはまだ少なかろう。当史料館でも文書整理や文書検索に用いる状況には至っていない（なお、当館では全国の史料目録の所在情報の蓄積、及び館蔵自治体史の情報処理にコンピュータを用いている）。

しかし、興味深いのは昨今の印刷業界の事情である。われわれがコンピュータを活用する、しないにかかわらず、印刷物のほとんどはコンピュータやワープロといった電子機器を用いて刊行される。いわゆる電子組版（DTP）である。われわれが、例えば目録の手書き原稿を印刷所に渡すと、電子機器を用いて入力作業を行う。それはパートの人の手なども借りながら手分けして行われる。それを再び印刷所に集め、電子組版機にかけ細かいレイアウトを行い初校が出されることになる。ここで注意したい点はこの組版機にかけられる以前のデータが多くの場合、いわゆるテキスト・ファイルという形態をとる点である。この形のファイルは極めて汎用性が高く、最近の機種ならばパソコン・ワープロとも、メーカーを問わず読み込みが可能である。

よって、この段階のファイルは、印刷所にお願いして是非入手したい。中埜家文書の刊行においても担当のM社にお願いしたところ快く応じてくれた。入手の目的は、このデータをもとに中埜家文書一件ごとのデータ・ベースを作成することにある。もちろん、テキスト・ファイルからデータ・ベースを作成するには、クリアしなければならないいくつかの問題がある。もっとも重要になるのは文書一点に関するデータを一レコードとして切り、さらにその中を表題・作成年月日・宛名などといった項目ごとに切ることがスムーズにできるかどうかという点である。しかし、今回の確認によれば意外に処理は簡単なようである。ファイルは、組版機にかけて一括処理を行う都合上、文末のようにきわめて整然とした形を取るのである。

紙幅の関係で詳細に論じることはできないが、置換などの一括処理により、効率良くデータを切ることができそうである。おいおい作業を進めてみたい。

なお、この作業はデータ・ベースによって目録を作成するのではなく、印刷所の力を借りてデータ・ベースを作成しようという考えによっている。広範に行われると、印刷所側でもより配慮した形でデータ入力を行うことも予想される。ともあれ、こと「もったいない」という思いから始まったことである。

★（半田村庄屋役申付書）☆半田村半左衛門宛　午（弘化三年）四月B小切紙C一通D608-4

★（半田村庄屋役病気退役許可）☆半田村庄屋半左衛門宛　申（嘉永元年）四月B小切紙C一通D608-5

★（半田村庄屋役申付書）☆半田村中野半左衛門宛　子（元治元年カ）四月B小切紙C一通D6

第十二回国際文書館評議会（ICA）大会参加記

丑木幸男

一九九二年九月六日から十一日まで、カナダのモントリオールで開催された、国際文書館評議会（ICA）第十二回大会に参加した。四年に一度開かれ、文書館界の国際的セレモニーでもある。一二〇か国から二千六百人ほどの出席といい、日本からは二十三人が参加した。カナダ各地の文書館職員がお揃いのTシャツで、受け付けやら準備やらにボランティアで大活躍してくれていた。

大会に出発する直前に史料管理学研修会の講義があり、その準備に追われ、締め切り期限をはるかに過ぎた自治体誌の原稿を書き上げて、宅急便で送り、大会の予備知識や準備もできずにあわただしく出発した。ほとんどの参加者は同じように仕事をやりくりして、各国から出席したのであろう。

成田を五日に十六時に出発し、十一時間後の朝六日の五時にデトロイトに到着したはずだが、現地時間は五日の十四時であった。十八時十五分にモントリオールに到着した。時差ぼけと緊張感で、夜中に目が覚めて眠れない状態が続いたが、三日目に前後不覚になるまで眠りこんだおかげでふっきれたようだ。

六日は会場のパレデコングレに一行とともに午前中に行き、受け付けをしてから、モントリオール旧市街地の見物をした。市開設三百年祭とかで博覧会などがあり、日曜日でもあったので街はにぎわっていた。石造建造物が多く石畳の道も落ちついた風情がある。金髪碧眼の絵に描いたような「外国人」が多い。フランス系の人種が多く、広場や街路にパントマイムをやったり、ヴァイオリンなどをひいており、文化的にもフランス系が色濃いとみられたが、アメリカナイズされた店舗も多い。日本の企業は大きな看板を掲げて、存在を誇示しているようである。

午後五時から開会式があり、フランス語の挨拶が多く国際会議らしく、さまざまな民族衣装もみえた。

七日・八日・十日・十一日の四日間に全体会が開かれた。基調講演「情報化時代」をフランス文化技術協力庁長官のジョン・ルイス・ロワが全体会冒頭に行った。

第一全体会はテーマを「配属から専門家へ　アーキビストの認知」として、たまたま人事異動によって文書館に勤務したという受け身の姿勢ではなく、アーキビストとしての専門性は何かを、ノルウェーのトロムソ州文書館のリブ・マイクランドが問題提起した。

次の個別報告があった。

ベルー・ポンティフィカカトリック大学のセザール・グティエレス・ノムス「大学のアーキビスト」

ベルギー国立銀行のマルセル・バン・キャンプ「企業アーキビスト」

ケニア国立公文書館のM・L・ムワンギ「行政アーキビスト」

ハンガリーラジオのマグダレナ・セーヴ「アーキビストと特殊メディアコレクション」

第二全体会は「文書館業務の標準化、情報化時代のトゥール」をテーマとした。各国でさまざまな用語や業務が行われており、その統一的なモデルを検討すべきことを、アメリカのピッツバーグ大学図書館学部のリチャード・コックスが問題提起した。

第一分科会では、次の個別報告があった。

オーストリア国立文書館のレオポルド・アウワー「用語の標準化」

カナダのノバスコシア公共文書館のケント・ハワーズ「記述の標準化」

イタリア中央文書管理局のマリア・グエルシオ「文書館業務の標準化モデル」

第二分科会では次の個別報告があった。

フランス文書管理庁技術部のエルベ・バスティアン「選別の標準」

スリランカ国立文書館のP・マナンベリ「標準化トゥールとしてのRAMP研究報告書」

ロシア・記録文書管理業務全労研究所のV・V・トロクコ「文書館にコンピュータ技術をどう取り組むか」

日本でも各地の文書館で同じ様な業務を行いながら、少しづつやり方が異なり、そのモデルの必要が認識されている。もっとも、少しづつ違う点にそれぞれの館の独自性が発揮されており、必ずしもすべてを統一する必要はないという議論もある。世界的な規模でも同様な議論が行われるほど、文書館業務が普及したということであろう。

第二全体会終了後、市内のノート

ルダム寺院でモントリオール・シンフォニーのコンサートが開催された。ゴシック建築の教会の中でのクラシック演奏には味わい深いものがあった。日程の中でほとんど唯一の雷雨に見舞われたが、コンサートが終わるころにはきれいに晴れ渡っていた。

第三全体会では、「二十一世紀のニーズに答える専門家教育　アーキビスト教育」をテーマとして、ドイツのマールブルグ文書館学校のアンジェリカ・メンネハリッツが問題提起をした後に、次の個別報告があった。

ナイジェリア・イバダン大学図書館文書館情報学部のO・アルジブレイエ「隣接専門領域に学ぶもの」

スペイン・レイノ・デ・ガルシア文書館のペドロ・ロベス「アーキビスト教育の特殊性と一般性」

オーストリア・ニューサウスウェールス大学図書館学部のアン・ベダソン「研究計画の進め方」

最後にブラジル、カナダ、オランダ、セネガル、チェコの学生によるパネルディスカッションがあったが、時間がなく各自の意見表明にとどまり、議論にはならなかった。

第四全体会は「文書館システム―社会に奉仕するこの仕事」をテーマとし、関連機関との比較から文書館の機能を検討することを、エクアドル国立文書館のグレシア・バスコデスクデロが問題提起をし、次の個別報告があった。

イギリス古文書委員のジェームス・G・パーカー「文書館システム」

スイスの国連ACCISのジャック・レモワーヌ「情報ネットワーク」

ルクセンブルグのEC委員会のビンセント・パラジョン・コラダ「図書館システム」

カナダ、国立文化遺産情報ネットワークのペーター・ホムロス「博物館の経験に学ぶもの」

最終日はICA総会と閉会式があり、次回一九九六年に開催する中国からの挨拶と準備状況の報告があり、当館の安藤正人が参加者を代表して謝辞を述べ、盛大な拍手をあびた。

大会開催中、会場でさまざまな展示が行われており、文書史料だけでなく映像資料の、劣化・破損とその修復技術の試みやアーカイヴ用品などが出品されており、日本と同じ問題を抱えながら、それぞれに工夫をこらしていることが分かり、参考になった。

大会中間の九日には、ケベック、オタワ、モントリオールの文書館見学の日程が組まれ、私はケベック国立文書館に行った。バスで二〇人づつのグループに分けられ、順次館内の見学をした。行政文書の整理と受け入れを行っているが、その業務は順調にいっているためか、日本では手がまわらない写真やビデオなどの整理を光ディスクを導入して行っているのが印象的であった。所蔵している何万枚の写真はネガフィルムからすべてプリントしてあり、コンピュータに入力し、検索キーによって、画像がディスプレイに出力できるようになっている。行政文書が中心で民間史料は少ない印象であった。文書整理の伝統が永いために、文書の整理の整理と検索手段の作成はできあがっており、行政文書を整理から公開までのルールが完成しているので、文書以外の資料の整理と検索手段の作成に重点を移し、コンピュータを積極的に利用して、模索している段階であった。大会で標準化の議論などをしても実感として分からなかったが、日本では文書史料の保存と整理とが急務であり、それ以外の資料の重要性が認識されながら、そこまで手が及ばないのであり、その段階を経過した欧米の文書館では、次の段階の問題点を議論していたのである。行政文書の保存と整理についての日本の立ち遅れは歴然としているが、日本近世の村請制による名主文書の作成とその現在にいたるまでの伝来は、世界的にも特殊なものであることに気が付いた。民間史料は組合や教会に保存されていた史料があるが、日本のようにどの村にもあるというほどではない。ヨーロッパの実状は知らないが、日本の近世村落で作成し、伝来した民間史料は世界的に誇るべきものであろう。

大会終了後、日本からの参加者はグループに分かれて出発したが、私はワシントンの国立公文書館、ニューヨーク州立文書館、同市立文書館を訪問するグループに属した。いずれも職員数、建物ともに、日本の文書館とは隔絶した規模に圧倒されたが、保存修復設備の充実とアナリストの強い権限が特に印象深かった。

同行していただいた方がたに迷惑をかけながら、九月二十日、無事帰宅した。

史料管理学研修会検討会開催

史料管理学研修会の講師による検討会は一九八九（平成元）年度から実施されてきたが、本年度は、一九九二年一二月八日午後二時から国文学研究資料館大会議室において行われた。出席者は講師一八名、史料館員九名、および国文学研究資料館長・管理部長の計二九名であった。以下、その概要を報告する。

検討会は、森安彦、小山弘志館長の挨拶、館員・講師の自己紹介のあと、森安彦の司会により進められた。

まず最初に、渡邊尚志により今年度研修会の概要報告が行われた。そこでは、①研修会のカリキュラムは、長期・短期とも総論、史料論、史料・記録管理論、史料管理の実際、の四本の柱から構成されており、大枠では昨年度と変化ないこと、②受講者の内訳をみると、文書館職員、図書館職員、自治体史・大学史編さん室職員が中心であり、これに加えて長期課程には大学院生の参加が多かったこと、などが述べられた。

引き続き今年度研修生の意見として、①典籍・民具・ポスターなどの取扱い方や展示論、文書館と博物館との関係についての講義がほしい、②史料の補修や史料整理などの実習課目にもっと時間をさいてほしい、③募集要項をもっと広範囲に回してほしい、などの声が紹介された。

続いて安藤正人から、①研修会の講義内容をもとに『史料学・史料管理学講座（仮称）』の刊行をめざしたい、②従来の研修会の他に、数日から一週間程度のテーマ別コースを設けたらどうか、など研修会の今後の方向性についての提案がなされた。

以上の報告をふまえて、各講師が意見を述べた。そこでは、①事前に関連する講義間での内容整理が必要である、②研修会全体の中での理論と実務の位置付けと関連を明確にすべきである、③講義時間が足りない、④参加者のレベルが多様でどの層に的を絞って講義したらよいかの判断が難しい、⑤単位制・選択制の導入や研修会修了者を対象にした専門特別コースの設置を検討したらどうか、などの声が出された。

そして、全体討議を経て、午後五時に検討会は終了した。（渡邊尚志）

紙幣が語る江戸時代の流通模様！

江戸時代の紙幣

史料館叢書別巻Ⅱ　　国立史料館編

Ａ４版／布装上製／布装帖箱入／392頁〔カラー図版224頁＋解説38頁＋古紙幣目録118頁〕　東京大学出版会発行　定価３９１４０円

〈特色〉

■国立史料館所蔵の日本実業史博物館旧蔵古紙幣を目録化して収載！

■紙幣426点を地域別に整理・分類・分析！

■江戸時代の紙幣流通の背景を藩札、私人札など多様な紙幣の存在をふまえて解説！

■紙幣の表面・裏面を同一画面にほぼ原寸大で再現！

平成四年度　新収史料紹介

Ⓕはマイクロフィルムによる収集を示す。

Ⓕ 美作国津山　松平家文書（愛山文庫）

昭和六一年度、平成元年度、同三年度につづき、本年四年度も特別研究「近世史料の古文書学的研究」により、津山郷土博物館所蔵の松平家文書のうち、「国元日記」を中心に収集した。ただし「国元日記」は一部補修中のため、年代的に連続して収集することはできなかった。昨年補修中だったものは、今年は補修が完了していたので、その分は収録することができた。本年収集した「国元日記」は明和二年～同三年の四冊、天明五年・同七年・寛政元年・同四年の四冊、寛政五年～同九年の一〇冊、享和二年・同四年の各一冊、文化元年・同三年の各一冊、文化五年～同一二年の一六冊、文化一四年～同一五年の三冊である。この他、同館所蔵の村方文書の一部も収集した。

津山松平家の概要や既収集については本誌四六号・五二号・五六号を参照されたい。なお、大変お世話になった津山郷土博物館には深甚の謝意を申しあげる。

（現蔵者＝津山郷土博物館、津山市山下九二。収録点数二一リール、一二、一三七コマ）

Ⓕ 肥後国天草郡本戸組大庄屋　木山家文書

一九八二年から行なっている天領天草郡本戸組大庄屋木山家文書の第八次収集である。木山家の来歴及び木山家文書の全体象については、本誌第三六号を見られたい。

撮影は数年前より明治・大正・昭和期に重点が移っているが、今回の撮影史料の主なものは、(1)天草郡製糸伝習所関係（明治中期、女工繭渡帳など）、(2)天草郡繭販売購買組合関係（昭和十年代中心）、(3)本戸村議会・本渡町会関係（昭和十年代中心）のほか、近世文書で撮影もれであった土地関係帳簿、村入用・小作・講関係の帳簿などである。

木山家文書は、ごく一部を除いて網羅的に撮影する予定であるが、今回でほぼ九分通り終了した。（史料所蔵者＝本渡市浜崎町一―一五　木山惟彦氏。撮影点数八リール、四六一八コマ）

Ⓕ 美濃国大野郡高山町　高山町会所文書

飛騨の高山市郷土館に収蔵される「高山町会所文書」の撮影を昨年に引続きおこなった。

館報五六号でも触れたようにこの文書は、高山町町年寄の公文書であり、町年寄の職務の遂行にかかわって作成・保管されてきたものである。町年寄は、一之町の矢島氏、二之町の川上氏、三之町の屋貝氏が世襲しており、その端緒は金森時代（元禄五年に山形上山への転封）にまで遡る。会所の設置形態・場所などは時代により異なり、また、執務も三人での執務形態から一人ずつの月番制になり、また三人勤務に復し、さらに月番制になるというようにしばしば変化する。設置・執務形態の変化は、会所での文書の管理形態にも大きな影響を与えたことであろうが、現存する文書点数は少なくない（この文書群の目録は、現在作成中とのことである。）

今年度のマイクロフィルム収集史料は、昨年行った「町年寄日記」（文政一四年～明治六年）五九冊と、「町年寄願書留」（文政一〇年～安政三年）一〇冊に続き、未採訪分の「町年寄願書留」（安政四年～明治五年）四一冊を撮影した。これで「町年寄日記」「町年寄願書留」はすべて撮影を済んだことになる。

（現蔵者＝岐阜県高山市上一之町七五、高山市郷土館、収録点数一六リール、九四五二コマ）

受贈図書　平成四年度（二）

横浜の文化財―横浜市文化財調査概報(九)―〔横浜市教育委員会〕
横浜市文化財調査報告　第二十一輯の一〔同右〕
鉄舟小話(二)〔氷見新聞社〕
松平春嶽未公刊書簡集〔福井市立郷土歴史博物館〕
長野県史　通史編別巻　年表索引　年表・索引　民俗編第五巻総説＝〔長野県〕
各務野から各務原へ〔上村恵宏〕
春野町史　資料編二近世〔静岡県春野町〕
（兵庫県）市川町文化財調査報告　第4集〔市川町教育委員会〕
淡路人形浄瑠璃〔洲本市立淡路文化史料館〕
和歌山市史　第1巻〔和歌山市〕

井口村史〔広島市〕
日置町史〔(山口県) 日置町〕
団兵御仕成記(四)・(五)〔岩国徴古館〕
伊予吉田藩編年史料　藤蔓延年譜〔南予古文書の会〕
伊予吉田郷土史料集　第五輯〔(愛媛県) 吉田町教育委員会〕
吉田の文化財　第2集〔同右〕
図説・高知県の歴史〔河出書房〕
佐賀の部落史〔佐賀部落解放研究所〕
佐賀県教育史　第五巻　通史編(一)〔佐賀県教育委員会〕
富高古墳2号墳～範囲等確認調査報告書～〔日向市教育委員会〕
日知屋城跡〔同右〕
樋田遺跡〔(宮崎県) 東郷町教育委員会〕
鹿児島県史料　旧記雑録拾遺諸氏系譜三〔鹿児島県〕
鹿児島県史料　玉里島津家史料一〔同右〕
経済史文献解題1990(平成2)年版〔日本経済史研究所〕
大和紙幣圖史〔柳沢文庫〕
統計資料シリーズNo.40〔一橋大学経済研究所日本経済統計情報センター〕
日本近代教育史に関する専門用語の英訳標準化についての調査研究〔国立教育研究所〕
石炭研究資料叢書No.13〔九州大学石炭研究資料センター〕
市立大町山岳博物館40年の歩み
釧路市立博物館50年史
京都大学文学部博物館図録　第五冊
北海道博物館等施設所蔵史料等概況〔北海道開拓記念館〕
神仏習合をとおしてみた日本人の宗教的世界〔(財) 元興寺文化財研究所〕
熱田神宮文書　千秋家文書下巻〔熱田神宮宮庁〕
寛永諸家系圖傳　第五・六巻・索引〔日光東照宮社務所〕
閑情淡遠〔鶴岡市〕
東久世通禧日記　上巻〔霞会館〕
住友史料叢書　宝の山・諸国銅山見聞扣〔住友史料館〕
国勢調査報告府県の部　第五巻兵庫県三〔明石市教育委員会〕
明治維新と「解放令」〔大阪人権歴史資料館〕
全国水平社―人の世に熱あれ！人間に光あれ！―〔同右〕
朝鮮侵略と強制連行〔同右〕
日本古代・中世の生活保障〔桃山学院大学総合研究所〕
臨床研十年史〔東京臨床医学総合研究所〕
近世日本海海運と港町の研究〔小村弓〕
〔王舎城美術賓物館〕館蔵選
サントリー美術館名品選
北海道立文書館史料集　第七
青森県立郷土館調査報告　第26集
盛岡藩雑書　第五巻〔盛岡市中央公民館〕
山形村埋蔵文化財調査報告書　1〔(岩手県) 山形村教育委員会〕
寒河江市史編纂叢書　第41集〔寒河江市教育委員会〕
天童市史編集資料　第48号
新庄市史編集資料集　第12号〔新庄市教育委員会〕
田島町史　第10巻〔(福島県) 田島町〕
本宮町史　第5巻資料編Ⅱ近世(1)〔(福島県) 本宮町〕
福島県山都町文化財調査報告書　第12集〔山都町教育委員会〕
水戸下市御用留(一)〔茨城大学附属図書館〕
与野市史別巻　井原和一日記Ⅱ〔与野市教育委員会〕
富士見のあゆみ〔富士見市〕
市史調査報告書　第4～10集〔富士見市〕
所沢市史調査資料別集　14・15〔所沢市史編さん室〕
大沢家文書　近世Ⅱ・近代ⅠⅡ〔墨田区教育委員会社会教育課〕
文化財の保護　第22～24号〔東京都教育庁生涯学習部文化課〕
江戸川区の文化財　1992〔江戸川区教育委員会〕
江戸川区文化財調査報告書　第七集〔同右〕
江戸川ブックレット　No.9〔同右〕
遺跡確認調査報告書〔昭島市教育委員会〕
西多摩郡日の出町大久野志茂家書院調査報告書〔東京都教育庁生涯学習部文化課〕
東京都双盤念仏調査(二)〔同右〕
秦野市史史料叢書　6・7〔秦野市〕
藤沢山日鑑　第十巻〔藤沢市文書館〕
大和市史資料叢書　3〔大和市役所〕
伊勢原市文化財調査報告書　第七・八集〔伊勢原市教育委員会〕
寺泊町史　通史編上・下巻〔(新潟県) 寺泊町〕
(静岡県) 韮山町史　第六巻上
長野県史　美術建築資料編　全一巻(一)〔長野県〕
池田市史　史料編⑨〔池田市役所〕
門真市史　第二巻〔門真市〕
大谷女子大学資料館報告書　第26冊
赤穂塩業史料集　第二～五巻〔赤穂市教育委員会〕
阿州藍屋奥村家文書　第四・五巻〔(徳島県) 藍住町歴史館〕
中村平左衛門日記　第九巻〔北九州市立歴史博物館〕
益田家歴史資料目録〔山口県教育委員会〕
山口県歴史資料調査報告書　第4・6集〔同右〕
北海道立文書館所蔵資料目録　7
北海道立文書館所蔵公文書件名目録　7
山形県関係新聞記事索引　平成元年版〔山形県立図書館〕
福島県会津高田町近世近代文書所在目録

(1)・(2)〔会津高田町教育委員会〕
史料目録　30・31〔茨城県立歴史館〕
栃木県史料所在目録　第21集〔栃木県立文書館〕
益子町史料所在目録　第1～8集〔(栃木県)益子町〕
宇都宮大学附属図書館所蔵満洲関係資料目録
埼玉県羽生市近世史料目録　五〔幕領研究会〕
石川二郎旧蔵資料目録稿・森戸辰男関係文書目録稿〔国立教育研究所〕
保谷市史料所在目録〔保谷市史編さん委員会〕
伊勢原市史資料所在目録　2〔伊勢原市教育委員会〕
伊勢原市文化財資料所在目録〔同右〕
大磯町立図書館郷土資料蔵書目録　第1集・第2集追補版〔(神奈川県)大磯町立図書館〕
富山県公文書館文書目録　歴史文書三・公文書(1)
富士吉田市史資料所在目録　第九　十二・十四～二十二集〔富士吉田市教育委員会〕
岐阜県所在史料目録　第29集〔岐阜県歴史資料館〕
岐阜県行政史料目録昭和44年度編〔同右〕
静岡県周智郡森町所在古文書目録　第3～6集〔森町史編さん委員会〕
小塚文庫目録〔尾西市歴史民俗資料館〕
佐織町郷土史料目録〔(愛知県)佐織町役場〕
鶴田卓池関係資料目録〔岡崎市立図書館〕
菅江真澄資料内田文庫目録〔同右〕
丹後国与謝郡宮津元結屋川上家古文書目録〔京都府立丹後郷土資料館〕
立命館大学人文科学研究所所蔵近代日本思想史関係文献目録
高槻市史史料目録　第十二～十四〔高槻市役所〕
箕面市地域史料目録集　一～六〔箕面市役所総務部〕
箕面市行政史料目録　一・二〔同右〕
大阪天満宮所蔵古文書目録〔大阪天満宮〕
堺市議会図書室図書目録　I
大阪市教育研究所所蔵教育研究資料目録　第1～4集〔大阪市教育センター〕
大阪市教育センター所蔵教育研究資料目録　第5～7集〔同右〕
大阪市教育センター所蔵教育研究資料件名目録　第8～12集〔同右〕
新宮町古文書目録集　第三～六集〔(兵庫県)新宮町教育委員会〕
郷土資料室所蔵奈良県地域史関係資料目録〔奈良県立奈良図書館〕
広島市復興青年運動史料目録〔広島市公文書館〕
山口県歴史資料調査報告書　第二集I・II・第三・五集〔山口県教育委員会〕
伊予吉田藩是房村毛利家史料集　第一
行政資料目録追録（平成3年1月～12月受入分）〔愛媛県総務部学事文書課行政資料室〕
福岡県公共図書館郷土資料総合目録　昭和63年度版　追録1・3〔福岡県立図書館〕
鹿児島県下市町村誌（史）目録〔鹿児島経済大学地域総合研究所〕
本郷家文書目録〔秋田経済法科大学経済学部経済研究所〕
秋田県歴史資料目録　第二十八集〔秋田県立秋田図書館〕
古文書近世史料目録　第14号〔山形大学附属博物館〕
県内図書館等所蔵教育資料目録〔山形県教育委員会〕
諸家文書目録Ⅷ〔鶴岡市郷土資料館〕
福島県西会津町史資料目録　第1～4集〔西会津町史編さん室〕
学校保存の教育資料目録〔山形県教育委員会〕
山形県関係新聞記事索引　平成3年版〔山形県立図書館〕
山形県内出版物目録（1990.9～1991.12）〔同右〕
歴史資料館収蔵資料目録　第21集〔福島県文化センター〕
日立市郷土博物館収蔵資料目録　第8集
伊勢崎市史資料所在目録〔伊勢崎市教育委員会〕
幸手市史調査報告書　第4集〔幸手市史編さん室〕
鎌ヶ谷市史料目録　第二集〔鎌ヶ谷市郷土資料館〕
国立歴史民俗博物館館蔵史料目録　一
我孫子市史資料目録　9〔我孫子市教育委員会〕
習志野市史史料所在目録　第二集〔習志野市教育委員会〕
憲政記念館の二十年
明治大学所蔵内藤家文書増補・追加目録(1)・(2)〔明治大学刑事博物館〕
東京都公文書館所蔵庁内刊行資料目録27
豊島区立郷土資料館収蔵資料目録　第五集
古文書目録　付編Ⅲ・別集2・第十四集〔小平市中央図書館〕
日本外交文書　昭和期I第2部第2巻〔外務省〕
伊勢原市文化財資料所在目録　第2集〔伊勢原市教育委員会〕
神奈川県立文化資料館　県庁各課文書件名目録3
神奈川県立博物館　人文部門資料目録(11)
神奈川県古文書資料所在目録　第14集〔神奈川県立博物館〕
二宮町史新聞記事目録　第1～3集〔(神奈川県)二宮町〕
二宮町史資料所在目録　第1～3集〔同右〕

（以下次号）

彙報

○史料の収集

本年度のマイクロフィルムによる史料収集は、美作国津山松平家文書、美濃国大野郡高山町高山町会所文書、肥後国天草木山家文書について実施した（うち松平家文書は特別研究「近世史料の古文書学的研究」による）。各文書の概要については本号「新収史料紹介」を参照されたい。

○史料の所在調査

本年度は、松江藩郡奉行所文書（伝「御徒文書」）について実施した。

○史料保存機関事務連絡および調査

次の機関を対象に実施した。宮城県立図書館・福島県立図書館（二月一七日～一九日、深川美枝子）、郡山市立歴史資料館、山形県立図書館（三月四日～六日、林宏保）

○評議員会と運営協議員会の開催

一九九二年七月一七日・九月一七日・三月八日に運営協議員会、八月二〇日・九月三日・一二月一四日・三月一七日に評議員会がそれぞれ開催され、国文学研究資料館館長人事・教官人事・管理運営・次年度事業計画について評議ないし協議された。

○国文学研究資料館創立二十周年記念祝賀会の開催

一九九二年一一月六日に国文学研究資料館創立二十周年記念祝賀会が開催された。

○出版物の刊行

1『江戸時代の紙幣』を史料館叢書別巻2として刊行した。

2定期刊行物としては「尾張国知多郡半田村中埜半左衛門家文書目録」を『史料館所蔵史料目録』第五八集として、「信濃国松代真田家文書目録」（その六）を同じく第五九集としてそれぞれ刊行した。

3『史料館研究紀要』第二四号を刊行した。内容は次の通りである。

日本近世紙幣史管見……鶴岡実枝子
幕末維新期における村と地域……渡邊　尚志
戸長役場史料論(一)……丑木　幸男
近世在方町の町・宿呼称の変化について……渡辺　浩一
〈近世史料論1〉
「御用留」の性格と内容(五)―武州荏原郡上野毛村「御用留」の検討―……森　安彦
〈史料紹介〉
岡谷文書―幕末明治書翰類―(一)……原島　陽一
……松尾　正人

4国文学研究資料館二十周年記念行事の一環として、『国文学研究資料館の20年』および『特別展示目録』を刊行した。

5『史料館報』第五八号（本号）を刊行。なお次号は九月刊行予定。

○文部省科学研究費補助金の交付

一般研究A「史料所在情報の集約とその解析的研究」（代表森安彦）に四年計画のうち三年目として、四〇〇万円が交付された。

○一九九二年度史料管理学研修会修了証書の授与

所定の教科目を履修し、レポート審査に合格した次の方々に修了証書を授与した。

A長期研修課程修了者

氏名（所属）レポート題名

(1)中井　伸明（堺市立中央図書館）堺市立中央図書館における郷土資料（コーナー）の現状と課題―地域資（史）料を利用できる市内唯一の施設として―

(2)松下　孝明（広島県立文書館）広島銀行創業百年史編纂資料の整理について

(3)沖田　哲雄（中央大学大学史編纂課）大学史資料の公開に向けて

(4)松本　宏司（上野学園日本音楽資料室）上野学園日本音楽資料室における一点一枚で長期の利用と保存を考えた史料調書とそのマニュアル作成の試み

(5)福田八重子（大東文化大学図書館）大学図書館におけるコレクション資料の整理・保存（実践にそくして）

(6)木村由美子（牛久市役所市史編纂室）牛久市における小川芋銭関係資史料の現況調査

(7)新井　浩文（埼玉県立文書館）古文書史料の保存と利用―埼玉県立文書館における現状と課題―

(8)小寺　泰二（京都府立総合資料館）京都府立総合資料館における古文書資料の利用について―とくに閲覧利用を見直す―

(9)黒滝　哲哉（東京都公文書館）古代から中世における史料管理システムの変遷

(10)荒井　信司（千葉県栄町町史編纂室）区有文書の成立過程―旧千葉県印旛郡安食町地域を素材として―

(11)吉田　潤子（創価大学中央図書館）史料保存と大学

(12)石川　一樹（東京大学附属図書館）律令国家の文書管理

(13)原口　雅樹（大井町立郷土資料館）学校教育における資料館収蔵資料の利用について

(14)長田　由美（お茶の水女子大学大学院）アメリカ接収資料の返還とその後

(15)三好　祥子（お茶の水女子大学大学院）日本における史料管理方法について

(16)針谷　武志（多摩市史編纂室）武家文書史料の整理と構造分析に向けての一

試論―鷹見家資料調査を例に―

(17)丸山　美季（学習院大学大学院）
御用留の史料論的分析―武州秩父郡上名栗村の御用留の事例―

(18)三上　淳子（学習院大学大学院）
学習院大学史料館における「旧華族史料の所在調査」について

(19)岩橋　清美（法政大学大学院）
武蔵国多摩郡野津田村における名主の文書管理と「年代記」の作成

(20)永井美和子（早稲田大学演劇博物館）
明治期以降演劇未整理資料について

(21)中村　裕生
地域史編纂から文書館の設立へ

(22)高梨　節子
「上花輪歴史館」設立計画の報告書

(23)前田　留美（東京芸術大学大学院）
地券紙について

(24)河西奈津子（富山市郷土博物館）
史料取扱機関における史料の位置付けと職員の専門性―図書館、博物館、公文書館・文書館を取り上げて―

(25)大和　武生（徳島県立文書館）
徳島県における古文書収集の問題点

B短期研修課程修了者
氏名（所属）レポート題名

(1)本井　晴信（新潟県立文書館）
近現代史料の認識について―写真及び絵葉書を例に―

(2)野中　寛文（香川県学事文書課文書館準備室）
香川県史編さん資料の整理と問題点

(3)秦　哲夫（大分県総務部総務課）
大分県における公文書館の設置について―公文書の収集、整理、検索についての構想―

(4)松木　一祥（静岡県教育委員会県史編さん室）静岡県立文書館の設立に向けて

(5)藤井　寿一（田辺市役所市史編さん室）
安宅家文書の全体構造復元試論

(6)梅村　郁夫（山口県文書館）
文書館と基本的人権

(7)尾島　治（津山郷土博物館）愛山文庫の史料管理学的考察、を目指して

(8)山本　哲也（四国大学付属図書館）
一地方における戸長制度の展開

(9)横山　定（岡山県古代吉備文化財センター）近世大名の所領変化における文書の受渡について

(10)川合　健之（三重県学事文書課県史編さん担当）三重県史編さん室における藤堂藩関係資料の収集と今後の課題

(11)菊地　保男（秋田県立秋田図書館）
図書館から秋田県公文書館に移管される資料について

(12)長佐古美奈子（学習院大学史料館）
旧華族家史料所在調査について

(13)岡田　恵子（徳島大学付属図書館）
徳島大学付属図書館における古文書の扱いについて

(14)深来　恵子（鳴門教育大学付属図書館）
史料管理学研修会を終えて

(15)近藤　薫（鳴門教育大学付属図書館）
史料管理学研修と図書館業務

(16)上甲　典子（滋賀県栗東町教育委員会町史編さん係）自治体史における写真資料収集と今後の課題

(17)島村　長生（高知市民図書館）
高知市民図書館における史料の整理保存の現状と今後の課題

(18)入江真知子（福岡県立図書館）
福岡県立図書館に於ける近世資料の検索について

(19)橘田　裕美（東海大学付属図書館）
マイクロフィルム化史料の整理に関する一考察

(20)寺澤　尚（岩手県立博物館）
岩手県立博物館における史料整理の現状と課題

(21)福本紀美子（徳島県立文書館）
文書館に関する広報調査

(22)松尾　容子（徳島県立文書館）
徳島県立文書館における公文書の収集と管理について

(23)福田　憲熙（徳島県立文書館）阿波国美馬郡半田村大久保家文書について

(24)松下　師一（徳島県立文書館）出原家文書における整理の実際と史料管理史への展望

(25)屋良　奉子（沖縄県北谷町総務課）行政文書等の公文書館への移管について―沖縄県北谷町における事例報告―

(26)田島由紀美（徳川林政史研究所）
データベースが研究支援システムとなるために

(27)仲田　洋一（沖縄県文書学事課公文書館建設班）沖縄県立公文書館（仮称）の立地条件とその規模について

(28)吉岡　正司（徳島県脇町役場町史編集室）脇町史編集における新聞記事目録集の作成に当たって

(29)田口　俊幸（兵庫県文書課県史編集室）
史料管理学研修会を受講して―文書館のあり方を中心に―

○一九九三年度史料管理学研修会の開催予定

一九九三年度の史料管理学研修会は次の通り開催を予定している。追って募集要項を関係機関に配布する。

A長期研修課程　会場、国文学研究資料館　前期　七月五日～三〇日
後期　八月三〇日～九月二四日（前後期とも最後の一週間は研修レポートの作成にあてる。）募集人員三五名。

B短期研修　会場、京都市　京大会館
一一月八日～二〇日（最後の一週間は研修レポートの作成にあてる。）募集人員三五名。

なお、研修レポートの作成は長期・短期ともそれぞれの自宅ないし職場にお

いて作成してよいものとする。

○来館者・見学者（海外）

一九九二年一一月二五日、中華人民共和国国家档案局　栃少田氏ほか四名。

一九九三年一月五日、中国人民大学档案学院　馮恵玲氏。

○史料館研究・教育活動一覧（一九九二年発表のもの。ただし、大学出講は一九九二年度）

①森　安彦

・監修・共編著『世田谷区教育史』資料編五（世田谷区教育委員会）

・共編著『世田谷区史料叢書』第七巻（同前）

・監修・共編著『武蔵野の民具と文書』（武蔵野市教育委員会）

・監修・共編著『古文書を読む―解読実践コース』（日本放送協会学園）

・共著『新編ところざわ史話』（所沢市）

・論文「『御用留』の性格と内容㈣―武州荏原郡上野毛村『御用留』の検討―」（『史料館研究紀要』二三号）

・論文「若者組と幕府権力」（『古文書通信』第一二号、日本放送協会学園）

・論文「玉川上水と武蔵野の開発」（同前第一四号）

・論文「武蔵野風土記」第四回～第七回（『季刊武蔵野』第一八号～第二一号、武蔵野市）

・論文「地域文書館の役割」（徳島県文化の森通信『ステム』第五号）

・参加記「アジア・オセアニア地域におけるアーキビスト養成国際シンポジウム」（全国歴史資料保存利用機関連絡協議会『会報』第二四号）

・講義「古文書の収集・整理」（国立公文書館主催、第五回公文書館等職員研修会）

・講演「信達世直し一揆と武州世直し一揆について」（平成四年度歴史資料講習会、福島県文化センター・福島県歴史資料館主催）

・大学出講　上智大学文学部・同大学院「古文書学」

②丑木　幸男

・講演「戸長役場文書を読む」（栃木県立文書館主催古文書研修会）

・講演「磔茂左衛門一揆と沼田藩政」（高崎市郷土史講演会）

・史料館所蔵史料目録第五十六集『武蔵国大里郡大麻生村古沢家文書目録（その一）』

・著書『磔茂左衛門一揆の研究―上州真田氏と沼田藩―』（文献出版）

・編著『上野国郷帳集成』（群馬県文化事業振興会）

・編著『岡登用水史』（岡登堰土地改良区）

・論文「上野国寛文郷帳諸写本の検討」（『史料館研究紀要』第二三号）

・論文「神にまつられた代官」（『神道大系』神社編二十五、月報）

・論文「群馬県地方史研究の動向」（雑誌『信濃』第五一〇号）

・解説「近代史料論の模索」（津田秀夫『史料保存と歴史学』、三省堂）

・分担執筆『群馬県近代化遺産総合調査報告書』（群馬県教育委員会）

・大学出講　群馬大学教育学部　日本近代史特講

③大藤　修

・論文「近世文書論序説」中（『史料館研究紀要』第二三号）

・論文「近世後期の親子間紛争と村落社会」（渡辺信夫編『近世日本の民衆文化と政治』河出書房新社）

・論文「近世農民層の葬祭・先祖祭祀と家・親族・村落」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第四一集）

・史料紹介「村役人選出の入札と連判状」（『小山町の歴史』第六号）

・大学出講　立教大学文学部　日本史特講「近世の家と社会」

④安藤　正人

・論文「アーキビストはプロフェッションたりうるか？―リチャード・コックス『アメリカにおけるプロフェッショナリズムとアーキビスト』を中心に―」（記録管理学会『レコード・マネジメント』第一二号、一九九二年三月）

・論文「中国におけるアーキビストの教育と養成―ICA国際シンポジウムの報告を中心に―」（『史料館研究紀要』第二三号、一九九二年三月）

・講演録「記録史料の保存と整理」（南予古文書の会『記録史料を守るために』、一九九二年六月）

・分担執筆「都民の歴史文化活動の拠点めざして―いま公文書館は―」（『都政新報』三九一八号・三九一九号）

・論文"Archival Training in Japan", International Council on Archives, *JANUS*,1992.1

・論文"Japan Society of Archives Institutions",Australian Society of Archivists Incorporated, *Archives and Manuscripts*,vol.20,no.1,May 1992, 142-144.

・講演「文書館について」（武蔵野市歴史資料館基本構想委員会、一月一七日）

・講演「記録文化財の保存と文書館」（埼玉県立文書館主催文書資料取扱講習会、二月三日）

・講演「史料の整理と保存」（栃木県立文書館主催古文書研修会、二月二一日）

・報告「文書館におけるコンピュータ利用について」（神奈川県県民部公文書館開設準備班、三月二六日）

・講義「アーカイブズとアーキビスト」（法政大学・企業史料協議会主催ビジネス・アーキビスト養成講座、四月一

六日）

・講義「史料整理の原則」（法政大学・企業史料協議会主催ビジネス・アーキビスト養成講座、五月二八日）

・報告 "The Development of Archival Education and Training in Japan"（第五六回アメリカ・アーキビスト協会年次大会、モントリオール、九月一七日）

・講義 "Archives In Japan"（テキサス大学図書館情報大学院、オースチン、九月二二日）

・講演 "Archives In Japan"（オースチン・アーキビスト協会例会、オースチン、九月二三日）

・講演「史料の保存と管理」（島根県立図書館主催研修会、一〇月八日）

・講演「地域文書館の構想」（鳥取県立公文書館主催研修会、一〇月一五日）

・講演「文書記録の保存・利用と文書館」（広島県立文書館主催研修会、一一月一七日）

・大学出講　お茶の水女子大学文教育学部　日本史特殊講義（記録史料科学）（一九九二年一〇月一日～一九九三年三月三一日）

・研究助成「スカンジナビア各国歴史史料保存利用機関における歴史史料保存専門職の発生から発展に至る歴史と現状についての共同調査研究」（研究代表者）、スカンジナビア・ニッポンサカワ財団

⑤山田　哲好

・報告「史料の代替化」（於・記録史料の保存を考える会）

・講演「史料の保存と管理」（於・島根県立図書館）

・講演「保存の原則と管理」（全史料協研修会）

・編著『近世・近代史料目録総覧』（三省堂）

・大学出講　立正大学　博物館実習

・研究助成　「史料管理学に関する文献情報の収集とデータベース作成についての基礎的研究」文部省科学研究費一般研究(C)

⑥大友　一雄

・論文「近世社会における文書管理と文書認識―美濃国加茂郡蜂屋村を事例に―」（『史料館研究紀要』第二三号）

・論文「鷹をめぐる贈答儀礼の構造―将軍（徳川）権威の一側面―」（『国史学』一四八号）

・論文「近世民衆の文書認識と文書管理」（『アーキビスト』二七号）

・共著『取手市史』通史編Ⅱ（茨城県取手市）

・NHKデータ情報部編『江戸事情』第二巻産業編（林業部分担当）（雄山閣出版）

・報告「鷹をめぐる近世の贈答儀礼」（於、国史学大会）

・大学出講　国学院大学文学部　日本史演習Ⅰ

・研究助成「近世の贈答儀礼に関する基礎的研究」文部省科学研究費　奨励研究(A)

⑦渡邊　尚志

・史料館所蔵史料目録第五十五集『陸奥国白河郡踏瀬村箭内家文書目録（その二）』

・論文「幕末維新期村落論への視角―佐々木潤之介氏の世直し状況論をめぐって―」（『論集きんせい』一四）

・論文「幕末維新期における村と地域」（『歴史学研究』六三八）

・論文「近世村落共同体をどうとらえるか」（歴史科学協議会編『歴史における家族と共同体』、青木書店、所収）

・分担執筆「一九九一年の歴史学界―回顧と展望―『近世』」（『史学雑誌』一〇一―五）

・報告「幕末維新期における村と地域」（於、一九九二年度歴史学研究会大会近世史部会）

・報告「近世村落の身分階層構造―武蔵国多摩郡連光寺村を事例として―」（於、第三〇回部落問題研究者全国集会）

・大学出講　東洋大学文学部　国史学演習

⑧渡辺　浩一

・論文「在郷町における町年寄・若者仲間・祭礼」（渡辺信夫編『近世日本の都市と交通』河出書房新社）

・書評「田中喜男著『近世在郷町の研究』」（『史潮』新三〇号）

・報告要旨「近世城下町研究の現状と課題」（『都市史研究』№6）

・大学出講　秋草学園短期大学　日本文化史

お知らせ

来る四月一日より、閲覧提供している図書類及びマイクロ収集史料の紙焼本について、複写サービスを開始する予定です。

なお、詳細は情報閲覧室にお問い合わせ下さい。

◎閲覧業務停止のお知らせ

蔵書点検の実施にともない、左記の期間の閲覧を停止する予定です。

四月二六日（月）～五月五日（木）

史料館報　第五八号
平成五年（一九九三）三月三一日
編集兼　国文学研究資料館
発行者　史料館
〒一四二東京都品川区豊町一ノ一六ノ一〇
電話〇三(三七八五)七一三一(代)
印刷所
東京都台東区寿三ノ一四ノ五
有限会社　スミダ
電話〇三(三八四二)七三三三